

3校の事例から学ぶ言語活動実践のポイント

P.8〜25で紹介した3校の実践事例を参考に、言語活動を進める際の計画・実践のポイントを、東京女子体育大の田中洋一教授に解説していただいた。

1 知識の共有と管理職のリーダーシップで「ぶれない軸」をつくる

事例のどの学校も、生徒の実態を基に校内研究に取り組み、理論と実践の両面を大切にしている点が印象的でした。

言語活動は教科や教師によって関心や理解の度合いの差が大きいため、まずは「言語活動とは何か」という基礎知識の共有をお勧めします。共通理解のないままにいくら研修を積んでも成果は見込めません。吉野ヶ里町立三田川中学校（P.8）は、取り組みを始め

るに当たり、言語活動に詳しい識者の話を聞き、自分たちで文献を読み、言語活動とは何かという本質に迫ろうとしました。言語活動の質を高め学力向上につながるためにも、言語活動の目的はどこにあるのか、どのように自分の学校、教科で実践していくべきか、といったことを理解しておくことが大切です。

教師の共通理解を深める上で、管理職の役割も重要です。各教科・学級の先生に役割や

権限を与える前提として、趣旨を徹底する場面で管理職がリーダーシップを発揮することが必要です。事例の各校では、校長や教頭がけん引役となって言語活動の趣旨を徹底し、計画立案にも深く関わっていました。教師集団がまとまるには、常によれずに基本路線を提示してくれる存在が必要です。管理職の先生方には、率先してその役割を担っていただきたいと思えます。

2 指導計画を教師全員で共有し、教科・学年を超えた土台とする

教科のねらいはそれぞれ違っても、「言語活動で生徒に『生きる力』を付ける」という最終目標は同じ、ということを教科間で共有することが大切です。

府中市立府中第三中学校（P.14）では、全教科の言語活動の指導計画を立て、学校全体

で共有しようとしています。指導計画の立案は、学校全体の共通理解を図り、足並みをそろえる上で何よりも重要な鍵を握ります。教科間の連携を踏まえた計画が立てられれば理想ですが、まずは担当教科以外の教科でどのような言語活動をしているのかを知るように

しましょう。教師の思いつきや教科の都合だけで言語活動を進めるのではなく、教科間の連携や学年ごとの積み重ねを意識することが大切であり、指導計画の立案と共有はその第一歩となります。

言語活動で授業を捉えなおす

3

研究授業では「子どもたちの思考の深まり」を評価する

研究授業で大切なのは、担当教科に関係なく全教師で話し合える共通の観点を示すことです。「自分は国語科だから社会科のことは分からない」となると、言語活動で有意義な研究を進めることは難しくなります。四十町立窪川中学校（P.20）は校内研究を頻繁に行い、教科を超えた意見交換を活発に行っています。

言語活動の研究では、その活動によって生徒は考えを深められたか、自分の考えが持てたかという視点が有効です。府中第三中学校が指導案に「本時における言語活動の視点」を盛り込んでいるのは、言語活動における研修の核心を突いています。

授業者は、今回の授業でどこに言語活動を入れるのか、どんな力が付くと想定するのか

を指導案に明示する。参観者は、生徒の考えが深まったかどうかを評価する。この方法なら、教科が異なっても意思疎通が図れるはずだ。「本時の活動で生徒の考えは深まったのか」「深まっていないなら発問にもう一つ条件を増やしてはどうか」「生徒が考えやすくなるように資料をもう一つ用意したらどうか」など、有意義な話し合いになるでしょう。

4

学び合いを取り入れる際は生徒に応分の役割を持たせる

窪川中学校ではグループ活動による学び合いを言語活動の中心に据えています。グループで考えを出し合うことで、思考力を高めるというのはまさしく言語活動であり、考えを深める有効な手立ての一つです。

取り入れる際には、どの学力層の生徒もそ

れぞれ力を伸ばせるような工夫が必要です。生徒が応分の働きを果たし、生徒の役割が固定しないよう配慮しましょう。三田川中学校のように、座席の場所などで役割を自動的に決め、機会を平等に与える方法も有効です。

忘れてはならないのは、言語活動における

学び合いは手段であり、生徒の考えを深めるためにあるということです。「発表の仕方が良かったか」「記録はこのように取らせた方が良い」といった手法論に偏ることなく、子どもの思考を深めるような指導を模索していただきたいと思います。

5

言語活動に慣れ親しむ場を教科学習以外で設定する

今後は、教科学習以外にも言語活動を意識して行う必要があるでしょう。三田川中学校の「今日のことば」のように、日常的に言語活動を展開することは意義があります。

新学習指導要領では、特別活動など授業以外のさまざまな場面でも言語活動の充実を促

しています。特別活動の言語活動も教科学習と同様に、活動目標を達成する手段であることに変わりはありませんが、教科学習よりもっと自由に言語活動そのものを体験させてもよいと思います。学活でクラスメートの話を聞いたり、まとまった文章を読んで感想を

書いたりするのは、言語活動に慣れ親しむ上で有効ですし、物事をじっくり考える習慣を付けるためにも有意義な活動になります。

授業との相乗効果を高めるためにも、学校生活のさまざまな場面で言語環境を整えることは、今後ますます重要になるはずです。